（公財）中央果実協会
No.151

米国　カンキツグリーニング病と戦うフロリダ州の柑橘類

FreshFruitProtal　2023年8月10日

今年、フロリダ州のオレンジ出荷量は記録的に少ない。悪天候と相変わらずのカンキツグリーニング病により、2023年の出荷量は第二次世界大戦以来最少である。しかし、この分野はその回復力を証明し、すでに復活に向けて取り組んでいる。

フロリダ州柑橘類組合のマシュー・ジョイナー執行副会長兼CEOは、本サイト（FreshFruitPortal.com）に対し、2022年9月のハリケーンイアンとそれに続くハリケーンニコルによる被害が今年の出荷量減少の主要因であると語った。（以下「　」は同氏の発言）

「残念ながら、それ（ハリケーンイアン）は州内の柑橘類産地の中心部を通り過ぎた。その結果、予想生産量に対して60％以上、おそらく70％近く減収した。」

この幹部は、ハリケーンが樹上にほとんど果実を残さなかったため、今シーズンの出荷量は、昨年の4千万箱とは極めて対照的な1,700万箱（90ポンド（40.8kg）/箱）で終了したと付け加えた。

同氏は、量が少ない一方で品質は良好だが、果樹園には遅れて現れる嵐の影響がまだ出ていると言う。

「強風とその後の洪水で果樹が痛めつけられたため、嵐の後数週間、場合によっては数か月もの間、落果が続いた。このため、ハリケーンの当日に果実が吹き飛ばされただけでなく、その後も果実が失われ続けた。」

栽培面積も減少した。これは主に気象災害によるものであるが、フロリダ州には毎年多くの人口が流入しているため、開発のためでもある。

「嵐で被害を受けた果樹を植え替える場合、苗木を入手するのに時間がかかるため、苗木を発注してから植えるまでに18～24か月かかる。果実が生るまでにはさらに3～5年かかる。」

同氏はさらに、植え替えられた果樹の多くが「生産が始まらないうちに別の嵐によって一掃され、」2023年の数字をさらに失速させたと述べた。

「我々は最盛期には、3億箱強を出荷し、栽培面積はおそらく80万エーカー（約32万ヘクタール）あった。つまり、栽培面積は約50％減少している。さらに、明らかに、出荷量はそれ以上に減っている。しかし、栽培面積の面ではまだ非常に大きな存在感がある。」

カンキツグリーニング病：本セクターの最大の敵

カンキツグリーニング病としても知られる黄龍病（HLB）は、侵入害虫であるミカンキジラミによって2005年にフロリダ州に持ち込まれた。

それ以来、HLBは州内のすべての商業的果樹園に広がり、果樹の全般的な健康を害し、時間の経過とともに果実の生産量が次第に少なくなることで、出荷を妨げている。

これらの壊滅的な影響に対抗するために、生産者らは園芸的な処理と実践を組み合わせている。

「いくつかの新しい治療法、植物成長調整剤、殺菌剤などがあり、カンキツグリーニング病に対処するという点で実際に効果があるものがある。それらは治療法ではないが、果樹を健康で生産的に回復させることができる。」

新しい栽培品種に関してジョイナー氏は、抵抗性品種を育種するためにかなりの金額と時間を投入したとしつつ、それは簡単なことではなく、最終的な結果が出るまでに時間がかかると説明する。

「我々は成果に近づいている。カンキツグリーニング病に対して従来よりも抵抗性のある品種、台木、接ぎ木は多いが、完全な抵抗性を持った品種が必要である。我々はこれらの育種努力を通じて次第にそれに近づいていると思う。」

（2024年5月に「柑橘類組合」の表記を修正しました。）